ISSN 1880-585X

sendai-city chronicles communication paper.

せんだい 市史通信

第26号
仙台市博物館
市史編さん室

昭和初期の中野小学校(『わたしたちの中野』より)
左上の詩は校歌の無かった時代に校歌代わりに歌われた運動会の歌

中野小学校に保存されていた杉の切り株の調査

モノがたり 仙台

大杉の記憶

その小学校は、1学年1クラスの、仙台市内では小さな小学校です。周囲に広がるのは、昔からの集落と新しい住宅地。近くを流れる大きな川をのぞむと、向こう岸には田んぼや畑がずっと続いています。そんなのどかな風景の一方、徒歩20分ほどでたどり着く海辺にはタンカーが出入りする港があり、大きな工場も立ち並んでいるという、まるで仙台のさまざまな要素をぎゅっと詰め込んだような地域にある学校でした。創立は明治6年(1873)と古く、138年の長い歴史の中で何回かの引越しを経て今の場所に移ったのは40年前。学校の敷地が、港の建設により工場用地になったためでした。

その小学校の玄関には、きれいにラッカーが塗られた大きな切り株が置かれていました。由来を知る人は多くはありませんでしたが、毎日、子供たちやお客さんを出迎えたり、その上にさまざまなお知らせのチラシが置かれたりと、学校の顔として地域の方々に親しまれた存在でした。

その切り株は、今は工場となってしまった、もとの校庭にそびえ立っていた古い杉の木でした。学校の児童会の名前がこの木にちなんで「杉の子児童会」と名づけられているように、学校のシンボルでした。昭和22年(1947)に事情があって切られてしまいましたが、根元部分だけは残され、学校の「宝」として大事に保存されてきたのです。

平成23年(2011)3月11日に襲った大津波は、その小学校に大きな被害を与え、切り株も校舎の奥の方へ押し流してしまいました。しかし、切り株は幸いにもがれきの中から見つけ出され、自衛隊の協力によって無事に運び出されました。

その後、津波でぬれてしまった古い資料を保存しようと学校を訪れた博物館のスタッフは、この切り株を見て驚きました。数えてみると、年輪が三百数十本もあったからです。伐採されたのが60年ほど前ですから、その誕生は約400年前。つまり、伊達政宗の時代にまでさかのぼります。これくらい古い時代のもので、年輪の状況がわかる杉は、宮城県内にはほとんど例がありません。学術的にとても貴重な切り株とわかったのです。

今から400年前、やはり大きな津波がこの地方を襲っています。この杉は、その復興の過程で植えられたものかもしれません。伊達政宗は杉の有用性に着目し、その植樹を大いに奨励したことが記録に残っています。杉が立っていたころの校地は、江戸時代に仙台藩士の屋敷があった場所とも伝えられていますので、政宗の政策を受けて、家臣が自分の屋敷の居久根として植えたものかもしれません。

そんな貴重な歴史をもつ仙台市立中野小学校の切り株は現在、東北大学植物園で一時保管され、保存と研究のための手入れが行われています。この地域や小学校が経験してきた歴史を忘れることなく、後世に伝えていく。そのためにも、この切り株を将来にわたって保存していくことが必要なのです。

街の牛乳物語

いまから150年ほど前、幕末の仙台藩主伊達慶邦（よしくに）の夫人・八代姫（やよひめ）は、
病弱な体質を改善するため、実家の父・水戸藩主徳川斉昭（なりあき）の勧めで
牛乳を飲むことを習慣にしていたという話があります。
当時、牛乳を飲むことはとても珍しく、
これが「仙台での牛乳飲用の始め」とも言われています。
このように珍しかった牛乳ですが、やがては、
仙台の日常生活に馴染み深いものになっていきました。

※昔の写真を今の風景に重ねて紹介しています

八幡1丁目にあった工藤牧場　昭和4年頃
（個人蔵）

上杉5丁目にあった東皐舎　大正4年（『仙台アルバム』より）

戦前の搾乳所分布図

明治34年（1901）～昭和8年（1933）の仙台市地図などに見える主な搾乳所

① 菅原搾乳場	⑪ 養生舎	㉑ 佐藤牛舎
② 鈴木搾乳場	⑫ 六九園牛舎	㉒ 安井牛舎
③ 工藤牧場	⑬ 三浦牧場	㉓ 高橋搾乳場
④ 高野牛舎	⑭ 第十厚生舎	㉔ 清水牛舎
⑤ 早川牧場	⑮ 大童牛舎	㉕ 半田牛舎
⑥ 今野牧場	⑯ 入間搾乳場	㉖ 笹牛舎
⑦ 飯田牛舎	⑰ 赤間搾乳場	㉗ 東北学院労働会牛舎
⑧ 前田牛舎	⑱ 梶原搾乳場	
⑨ 青野牛舎	⑲ 山本牛舎	
⑩ 東皐舎	⑳ 手島牛舎	

牛乳を飲む習慣がなかった日本人の生活に、牛乳が広く一般化したのは戦後でした。しかし、戦前の仙台の地図には搾乳業者（乳牛を飼育し、乳を搾って牛乳を生産・販売する業者）の名が多く記載されています。つまり、仙台では牛乳を飲む人が当時から多かったということなのですが、それはいったいなぜでしょうか。

その理由はまず、仙台が「街」だったからです。乳製品が食卓にのぼるのはハイカラなことだと考えられていました。ですから先進的な考えを持つ人が多く住む都市部では、牛乳の需要が高くなります。牛乳需要量の多寡は、都市化のバロメーターのひとつといえるかもしれません。

そして最大の理由が、牛乳飲用を積極的に勧める大きな機関があったということです。ひとつは、宮城病院（東北大学病院の前身）に代表される大病院。そしてもうひとつが、陸軍第二師団です。八代姫の話にみられるように、牛乳はそもそも滋養強壮の薬として飲まれていました。病人の快復のため、堅固な兵士の体を作るため、牛乳が積極的に飲用されたのです。

現在と違い、当時の牛乳のほとんどは高温殺菌で、その日の朝に搾乳したものを直ちに処理し、朝のうちに熱いままで配達しなければ腐敗するおそれがありました。となると、配達先と搾乳所は、どうしても近い距離になくてはなりません。大量の需要に応えるため、市街地の近くに搾乳所が増えていったのは当然の成り行きでした。

花壇にあった早川牧場　大正4年
（『仙台アルバム』より）

学生と牛乳

明治40年頃、牛乳配達はすでに仙台の朝にはお馴染みの風景となっていました。市内の牛乳配達人の数はおよそ300名。そのうちの150名は仙台市外出身の苦学生だったそうです。

当時の牛乳配達は搾乳業者からの請売でした。自分で用意した70銭ほどの配達用牛乳缶を持って朝5時頃に搾乳所へ出向き、受け取った牛乳を2時間ほどかけて各自の得意先へ配達、1升につき10銭の収入を得るという仕組みです（当時、そば1杯は3銭。日雇い労働者の日給は49銭）。一朝の配達量は平均1升5合～2升だったそうですが、弁舌巧みな学生などはどんどん得意先を増やし、多い者で3升5合も配達したといいます。学生の牛乳配達人はこうして、一ヶ月に少なくとも5～6円を稼ぎ、学費や生活費に充てていました。

また、学生自らが搾乳所を経営するという動きもありました。それが、東北学院労働会の牛乳部です。

東北学院創立者押川方義（おしかわまさよし）の指導の下、学生の生活費をまかなうために結成された勤労学生による労働会は当初、農業、ランプ用石油や米穀・醤油の販売、新聞や牛乳の配達などをおこなっていました。のちに、収益率が比較的高かった牛乳配達を拡大することを計画し、ついには乳牛の飼育・搾乳に乗り出します。明治30年、東九番丁（現在の榴岡5丁目周辺）に2,100坪の土地を買い入れ、12頭の乳牛を飼育する東北学院労働会牛舎を開設。市街地に近いため配達に便利だったこともあり、牛乳業は活況を呈しました。

上：東北学院労働会牛乳部で配達をしていた学生　左手に下げているのは配達用牛乳缶／下：榴岡5丁目にあった東北学院労働会牛舎
明治40年頃（学校法人東北学院蔵）

広瀬川と牛

乳牛を飼育する際、なによりも必要となるのが餌です。そう聞いてまず思い浮かべるのは広大な牧場で牛がのんびりと食む牧草ですが、仙台の市街地近くに連なっていた当時の搾乳所では、少し様子が異なります。

早川牧場など、大きな放牧場を持つ搾乳所もありましたが、多くは豆カラやキビ、コーリャンを飼料として乳牛を飼育していたようです。また、河原の草も重要な飼料でした。広瀬川周辺にあった搾乳所の乳牛たちが朝夕、列を作って道路を渡り、河原に放牧される風景は、昭和40年頃まで見られたといいます。

ですが、この飼料の問題とのどかな乳牛の行進が、戦後、市街地の搾乳所激減の要因となりました。満州などから安く入ってきていた豆やコーリャンは終戦とともに高騰し、搾乳業者は深刻な飼料不足に見舞われたのです。宮城県畜産課は飼料不足を打開するため、市街地の搾乳所を解散して郊外へ移転するよう積極的に勧めます。また、戦後復興で都市化が加速するなか、道路や川を汚染する牛糞が衛生面から問題視されるようになったのです。こうして街の搾乳所は、徐々に姿を消していきました。

澱橋を下りた広瀬川畔での放牧風景
昭和初期（仙台市博物館蔵）

仙台市博物館の 資料レスキュー活動

東日本大震災では多くの歴史資料が被害を受けました。津波で海水に浸ってしまった資料もあれば、家や蔵が地震によって壊れたため避難させざるを得ない資料もありました。

仙台市博物館では、歴史資料を地域の大切な文化遺産として後世に伝えるために、被災したこれらの資料を救出（レスキュー）する取り組みを行っています。

その活動の一つとして、まず文化庁や国立文化財機構が中心となって行った文化財レスキュー事業への協力があります。全国各地から研究者や博物館学芸員などが宮城県に集まり、津波の被害が大きかった沿岸部を中心に、文化財のレスキュー活動が行われました。仙台市博物館は、その現地本部として活動の拠点となると同時に、職員も随時、レスキュー活動に参加しました。

それとは別に、博物館独自で仙台市内を対象とした被災状況の調査と、被災した資料のレスキュー活動も行っています。4月下旬以降、博物館のスタッフが中心となって300軒近い旧家を訪問し、被災状況や歴史資料の保管状況を確認しました。そしてレスキューが必要なものについては、状況に応じた措置を採っています。

博物館でレスキューした屏風
破損箇所から見える裏張りの
古紙も貴重な歴史資料である

津波でぬれた古写真の洗浄作業

真空凍結乾燥処置を行うため
ビニール袋にパックした資料

例えば、津波で海水に浸ってしまった資料は、乾かして泥を落とし、場合によっては専門機関へ依頼して真空凍結乾燥によって水分を除去する処置をお願いしています。

また、家屋や蔵が壊れてしまって保管が難しい資料をお預かりし、少しずつ整理や調査を進めています。目録の作成や写真撮影を行い、将来の保存や活用に備えるのです。現在、10軒以上のお宅から被災した歴史資料をお預かりし、作業を進めています。このほか、津波で被災した小学校や消防施設の書類や各種資料を保全する作業も進めています。

「文化財」というと、国宝や重要文化財、あるいは美術的な価値が高いものを思い浮かべるかもしれませんが、地域にとって大切な歴史資料は、それだけではありません。江戸時代の古文書はもちろん、明治、大正、そして昭和の書類や印刷物、写真なども地域の歩みを伝える重要な資料となるのです。

仙台という地域の歩みを伝え、また未曾有の大災害であった東日本大震災の記憶を残すためにも、歴史資料の保存をお願いします。そして、ご不明な点やご相談があれば、仙台市博物館市史編さん室までご一報ください。

仙台の歴史を掘り下げる
「仙台市史」好評発売中！

◎次回刊行予定
通史編9　現代2
◎続刊予定
特別編／地域誌、年表・索引

通史編／3,000円(本体2,858円)
資料編／4,000円(本体3,810円)
特別編／6,000円(本体5,714円)
※板碑のみ5,000円(本体4,762円)
1冊ずつお求めになれます

通史編　1原始 ※改訂版とセット販売になります　2古代中世　3近世1　4近世2　5近世3　6近代1　7近代2　8現代1

特別編　1自然　2考古資料※完売しました　3美術工芸　4市民生活　5板碑　6民俗　7城館　8慶長遣欧使節

資料編　1古代中世　2近世1藩政　3近世2城下町　4近世3村落　5近代現代1交通建設　6近代現代2産業経済　7近代現代3社会生活　8近代現代4政治・行政・財政　9仙台藩の文学芸能　10伊達政宗文書1※完売しました　11伊達政宗文書2　12伊達政宗文書3　13伊達政宗文書4

県内主要書店、仙台市博物館でお求めになれます。
配送をご希望の方は、電話・FAXで㈱宮城県教科書供給所へお申し込みください。

発　売　元／㈱宮城県教科書供給所
〒983-0034 仙台市宮城野区扇町一丁目6-3
TEL 022-235-7181　FAX 022-235-7183
お問合せ先／仙台市博物館市史編さん室
〒980-0862 仙台市青葉区川内26
TEL 022-225-3074

お知らせ

『通史編1　原始　旧石器時代』（改訂版）の刊行について

旧石器遺跡発掘ねつ造事件をうけて改訂版を刊行しました。ご購入いただいた元版を博物館の「市史改訂版」係まで送料着払いでお送りいただくか、博物館まで直接お持ち下さい。お届けいただいた元版に改訂版を添えてお返しいたします。詳しくは市史編さん室までお尋ねください。

『特別編2　考古資料』正誤表シールの配布について

旧石器遺跡発掘ねつ造事件をうけて、『考古資料』のねつ造部分について修正内容を示した正誤表シールを作成しました。『考古資料』をご購入いただいた方に配布しておりますので、詳しくは市史編さん室までお尋ねください。

せんだい市史通信 第26号

発行年月日／平成24年1月31日
編集・発行／仙台市博物館市史編さん室　TEL／022-225-3074
〒980-0862　仙台市青葉区川内26　URL http://www.city.sendai.jp/kyouiku/museum

このリーフレットはリサイクルできます。「雑がみ」へ分別しましょう。